○なんくるないさぁ○

なな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
○なんくるないさぁ○

【Ｎコード】
Ｎ５７７７Ａ

【作者名】
なな

【あらすじ】
沖縄県。とある高校。物語は３人の元気な女の子を中心に進んでいきます。

1：紹介

―これは、沖縄県の某高校に通う女子高生3人を中心に進んでいく物語です。

＋中心人物＋

・金城未月（きんじょうみつき）―高校2年生。ちびは禁句。同じクラスの裕也と付き合っている。帰宅部。

・仲村渠ゆな（なかんだかりゆな）―高校2年生。細身で美人さん。彼氏いない歴、17年。帰宅部。

・上原和音（うえはらかずね）―高校2年生。密かに、モテ系目指し中。ハンド部。後輩に人気。

2：自習時間　＊和音＊（前書き）

初めて小説を書きました。初めての上に、沖縄に住む私の普段の言葉使いで書いたので、読みにくかったり、意味の分からない部分もあると思いますが、楽しんでもらえると嬉しいです。

2：自習時間　＊和音＊

こんにちはー。
和音です。
今は自習時間です。
暇ー。
ひま。
ＨＩＭＡ！

周りを見渡してみた。
皆さん、寝てるか、ケータイいじってるか、トランプしてるか、お喋り中。
てか誰も勉強してねー。
自習なのにね。
あ、あたしもか。
えへ。

駄目だっ！
もぅ限界！！

あたしは、前に座っている未月に、ちょっかいを出すことにした。

「みつき～、遊ぼ～」

「やだ」

うわっ即答。

「え～？何でよ～？」

「未月は今、忙しい」

「ケータイいじってるだけじゃーん」

「いじってるんじゃなくて、裕也とラブラブメールしてんの！」

「は？メール？裕也、あそこいるじゃん」

あたしは裕也を指差す。

裕也は、ベランダ側の一番前の席に座り、ケータイをいじっている。

「だってー、直接喋るのって照れくさいしー。何て言うの？…初々しいじゃんっ？」

「うーん、意味分かんない。てか君達、付き合って2年目でしょ」

「もぅ邪魔っ！ゆなにでも遊んでもらいな。」

「ヒドっ！まぁいーか。じゃぁ、ごゆっくりぃ」

あたしは未月にかまってもらうのを諦め、次のターゲットのゆなを探した。

いた！
てか何やってんの、あの子？
ゆなは本らしきものを机の上に広げ、真剣な表情をしていた。
まさか勉強！？
ありえん～！！
真相を確かめるべく、あたしはゆなの方へ行った。
「って、雑誌じゃん」
ゆなは、真剣な顔して雑誌に見入っていた。
「あ、かんねー」
「何やってんの、あんたは？」
「あ、これ～？ほら、この子、しに可愛いさぁ。ゆなも前髪こんなしたいなぁと思って、研究してたわけよ～」
「……」
はっきり言って、ゆなは誰もが認める美人だ。
黙っていれば。
喋るとアホ丸出しと言うか、ボケボケと言うか…。
顔と性格が合わない。
学園祭のミスコンで圧倒的に1位だけれども、お笑いのボケ部門で

もトップ争いをしている。
本人は全く、自分が美人だとは思ってないが…。

「どしたのー？」

あたしが黙ったことに気付いて、ゆなが尋ねる。
正直、ゆなが指差したモデルより、ゆなの方が可愛いけどな。
て事は、黙っておこう。

「別にー。まぁ、前髪が眉上４センチのぱっつんなんて、有り得ないしねー」

「う…だって、なかなか同じ長さになってくれないんだよー」

「だから、自分で切るなよ」

「…今度こそは、上手く切れそうな気がするの！」

うん、気がするだけね。
とツッコミたいが…。
まぁいっか、ゆなだし。

「はいはい、頑張れ～」

「うんっ！ありがと」

あたし的にはやる気のない励ましをしたのだが、ゆなは嬉しそうに返事する。
まぁいっか、ゆなだし。

「ねー、かんねーとゆなもトランプ入らん？」

瞳があたしたちに声をかけてきた。
という訳で、帰りの会まであたし達は大富豪をして過ごしましたー。
てか、あたし１回も大富豪なれなかったー。
はぁ。

3：久しぶり　＊ゆな＊

やっほー。
ゆなだよー。
ゆなは今、一人で校門を出たとこです。
かんねー（和音）は部活。
みーつー（未月）は裕也とデートなんですって。
いーなぁ。
ゆなも彼氏欲しいなぁ。
何でゆなには、彼氏できないんだろ。
やっぱ可愛くないと、だめなのかなー。
ちょっと、一人落ち込みながら歩く。

「ゆなー？」

突然、後ろから名前を呼ばれた。
振り返ると、隣のクラスの真がいた。

「しーん！久しぶりぃ」

真とは1年の時同じクラスで仲良しだったが、2年になってからはほとんど喋っていない。

「だからなぁ。てか、ゆな1人だば？あ、和音はハンドか」
「うん。みーつーはデート」
「あい～、寂しいなぁ」
「そーなのよぉ…ってウルサイ！」
「おぉ！ゆながノリツッコミしたー」
「今できてた？ゆな、できてた！？」
「おー、良い感じだったよ」
「やったー」
「よし、じゃあアイスでも食べに行くか」

いきなり話が変わりました。
何かこのノリ、懐かしいなぁ。

「わーい、ゴチ」
「Ｗｈｙ？なぜに！？」
「えっ違うのー？」

「んじゃ、ジャンケン負けた奴が奢ることな」

「おけっ」

ジャンケンの結果…
負けました…。

「っしゃー」

「あーあ、しょーがない」

と言うことで、真にチョコチップアイスを奢る。
ゆなは、白イモ〜♪

「渋いなぁ」

「いーさぁ、白イモ美味しいんだよ」

「俺、紅イモなら食ったことあるけど…」

「食べてみる?」

「え…?」

仕方無いから、ゆなのアイスを味見させてあげた。
すると、真がうろたえている。

「なんでー？あまりの美味しさにキョドってる？」

「いや、えーと…」

「ん？」

「…何でもない」

「変なのー。あっそれより、

スイートポテトの味して美味しいっしょ？」

「あー、うん。まぁまぁ」

「まぁまぁ～？全く、お子様にはこの美味しさが分かんないのね」

「はー？ゆなに言われたくねー」

「何でよ～」

なんて、アイスを食べながらじゃれ合っていると、急にトイレに行きたくなった。

「ちょっと、ゆなトイレ行ってくるね」

「おー、ごゆっくり」

「そんなんじゃない！」

「あはは～」

全く。

真にはもっと、デリケートになって欲しいわ。

トイレを済ませ、手を洗う。

軽く髪を整え、真の元へ向かった。

「あのー、すみません」

突然、声をかけられた。

見ると、背が高い男の子がいる。

ゆなは１６５センチあるけど、彼はゆなよりはるかに高い。

短髪で、浅黒い。

あ、てか同じ制服。

「あのー、仲村渠ゆなサンだよね？」

「へ？あ、はい」ぼーっとしてた。

ん？てか何で名前知ってるのかな。

「ごめんなさい、誰でしたっけ」

「あ、ごめん。別に喋ったことはないんだけど。何回かミスコンとかで見掛けたから、名前知ってるんだ」

「あ、そーなんですか。名前、教えてもらってもいーですか？」

「あ、俺、玉城祐希。タメだよ」

「あ、こんにちは。ゆなです。ゆーきは何組？」

「3組。ゆなは7組でしょ？」

「うん、そーだよー」

「えーと、今一人？」

「んん、友達と一緒～」

「あーそっかぁ…。えーとじゃぁ、ケータイのアドレス教えて？メールしない？」

「うん、しよー。あ、ゆーきの、赤外線付いてる？」

「付いてるよ。赤外線でやろーか？」

「うん。せっかくハイテクなもの付いてるんだし」

「そーだな。じゃぁ送るよ？」

「はーい、来いっ」

アドレス交換して、ゆーきと別れた。
あっ、真のとこ戻らなきゃ。真が待ってるベンチへ走る。

「しーん、ごめんっ」

「おせー。余りの遅さに、今メール送ったさぁ」

「ごめんー。あっ」

メールが来た。
真からだ。

「あ、それ、今送ったやつ」

「あー…って何だこのメール」

真からのメールには、

おーい、便器にハマったのかー？生きてるかー？（笑）

と書いてあった。

「ハマるわけないさー、もぅ」

「違うばー」

「アドレス交換してただけだよ～」
「へ？誰と？」
ゆなは、さっきあった事を話した。
真の顔から、微妙に笑いがなくなっていく。
「ふーん」
「どしたの？」
「別に。そろそろ帰ろうか」
「えっ…うん」
何だろ。
何か、真怒ってる？
何で？
ゆな何か悪いこと…
あ、トイレから戻るのが遅かったからかな…
「真、ごめんね」
「は？」
「ゆながトイレから戻るの遅かったから、怒ってる？」

「…いや、違う。別にゆなに怒ってるわけじゃないよ」
「え？違うの？でも、怖い顔してる…」
「…あの、祐希とか言う奴がムカつくだけ」
「え？何で？知り合い？」
「……何でもない。あ、それより、さっきのアイスのお礼にコレやる」

そう言って真は、飴玉をくれた。
ゆなの大好きなりんご味。

「やったー。真、大好きぃ」
「……俺も」
「ん？何～？」
「はっ？何も言ってないよ」
「あれ？ま、いっか」
「おー、じゃーな」
「うん、またね～」

真にもらった飴を口に入れる。
りんごの甘酸っぱい匂いが口いっぱいに広がる。

「ん～幸せ～」

一人にやけながら、バスに乗って家に帰りました。
あ、後でゆーきにメールしよっと。

４：物足りない　＊未月＊

どーも、未月です。
さっき裕也と別れて、家に帰ってきたとこ。

最近、裕也と微妙なんだよねぇ。
いや、あたしが一方的にそんな感じ。
周りには、ラブラブだよ、とか言ってるけど…。

裕也は優しい。
未月の我が儘にも、怒らずに付き合ってくれる。
でも何か、物足りないっていうか…。
分かってる。
未月は贅沢すぎるって分かってるんだけど…。
やっぱ何か、刺激が欲しいっていうか…。
２年目だし、倦怠期ってやつなのかなぁ。

シャワーに当たりながら、ずっとそんなことを考えてた。

考えても仕方ない。
よし、出るかー。

お風呂場を出て、体を拭く。
あ、髪伸びてきたなぁ。
裕也はショートが好きって言ってたっけ。

胸の方まで伸びてきた髪を見ながら、そんなことを考える。

自分の部屋に戻り、何気なく机を見ると、携帯電話が光っていた。

「あ、メールだ」

裕也からかなぁと思いながら、受信フォルダを開く。

「真？」

そこには、友達の真からのメールが入っていた。
開こうと思うが、お腹が空いてることに気付き、後で見ることにする。

1階に降りると、父が肉じゃがをよそっていた。

「あれ？お母さんは？」

「今日は、夢月のＰＴＡの集まりだって」

「ふーん」

父はテレビを見ている夢月に、ご飯の準備ができたことを伝えると、
冷蔵庫からビールを取り出す。

3人で食卓につき、いただきますと声を揃えて食事を始めた。

「お姉、裕也クンとデートだったば？」

夢月が、サラダを頬張りながら尋ねる。

「まぁねー。スタバで喋っただけだけど」

「いーなぁ、夢月もスタバ行きたい」

そこかよ、と突っ込もうとすると、父が話に入ってきた。

「あーそういえば、昨日裕也クンと会ったなぁ」

「え？」

「部活帰りだったらしいが。バスケ頑張ってるみたいだな」

「あー…みたいね」

「今日は裕也クン、部活休みだったの？」

夢月が尋ねる。

「あー、うん」

まさか、未月の我が儘で休ませた、なんて言えない。
そう。
今日のデートは、部活に行こうとしていた裕也と、

「未月、スタバ飲みたい」
「ごめん、俺、今日部活だばーよ。土曜は休みだから、そん時行こう？」

「やだ。未月、今日がいい。…裕也、未月と部活、どっちが大事なの？」

と古風なやりとりをして、無理矢理行ったのだ。
優しい裕也は、それでも文句を言わずに、未月を選らんでくれた。

未月、サイテーだよね。
でもこの頃、こんな感じで裕也を困らせることばっかやってる。
自分でも分かってるんだけど…。

「今日の洗い当番は、夢月だな。じゃ、お先にご馳走様。」

「はーい」

父が食卓を立ち、テレビの所へ向かう。

「お姉、裕也クンと何かあったばー？」

「は？何でよー。別になんもないし」

「そー？」

「人のことばっか言わないで、あんたも彼氏作りなさい。じゃ、片付けよろしく～」

「はいはーい」

正直、夢月に、何かあったんじゃないかと聞かれた時はギクッとした。

「あ…」

真からメールが来ていたことを思い出し、2階へ上がった。

あーあ、メール返すの面倒くせー。ま、いっか。このモヤモヤを真にぶつけてやろ。

ところが、真の方がもっとモヤモヤした思いを抱えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5777a/

○なんくるないさぁ○

2011年1月16日07時08分発行